

花木鉢物の生産とコーティング肥料

—ヒラドツツジの鉢物生産におけるコーティング肥料の利用—

長崎県総合農林試験場

野菜花き部長 油屋吉之助

はじめに

ヒラドツツジはキシツツジ、リュウキュウツツジ、ケラマツツジ、モチツツジ、シナノサツキ等多くの原種の複雑な自然交雑によって成立した本県特産の常緑性ツツジで、これまでに394品種が選抜命名されている。ヒラドツツジは樹勢が極めて強く大型となり、公害にも強いので公園や道路植栽など緑化樹として広く利用されて来たが、花は大輪性で花色も豊富なことから鉢物に好適なものもあり、アザレアやクルメツツジに代る花木鉢物として大いに期待されている。そこでこれまでヒラドツツジの鉢物化のため品種選定、育苗、整枝法、用土、施肥法など一連の試験を行って来たが、その中からヒラドツ

ツジの養分吸収の経過と施肥について述べる。

1. 養分吸収経過

養分の吸収はツツジの生育に伴って消長すると考えられるが、ヒラドツツジ「舞姿」の2年生草を供試して5月2日に最終摘心した後に萌芽した第3次分枝の養分吸収経過を調査した。

施肥法は4月28日から11月まで毎週1回、1鉢当たり大塚ハウス1号0.06gと2号0.06gを100ccの水に溶かして施用した。

図-1 各分枝の生育経過

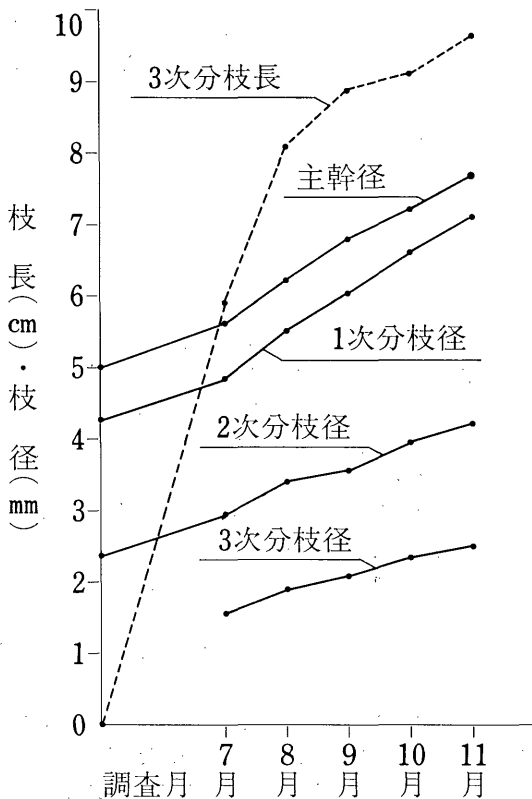
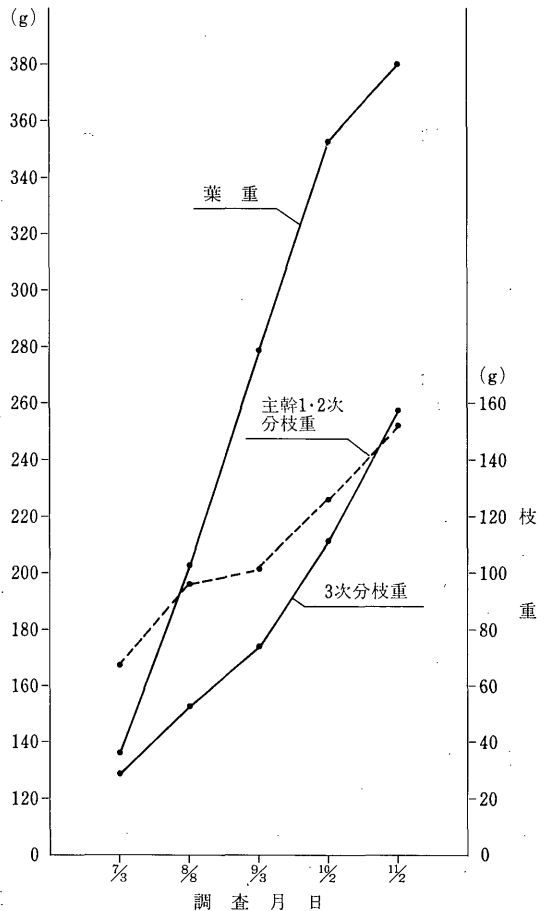


図-2 枝葉重の経過



摘心後萌芽した分枝は6月から8月までは急速に伸長したが、花芽分化、形成期に入ると枝の伸長は緩慢となった。この時の主幹と1次、2次分枝の直径および重量は全期間を通じてほぼ順調に増加しているが8月から9月にかけてはやや鈍った。これは夏季高温のためと考えられるが、花芽分化の開始時期でもある。(図-1、図-2参照)

葉重は10月までは急速に増加したが、花器が完成し、展葉が終った10月以降はやや鈍くなった。

表-1 花芽分化過程

調査月日	未分化	花房分化	りん片形成	がく片形成	花弁形成	雄ずい形成	雌ずい形成	雌ずい形成(器官完成)	胚珠形成
8月8日	36	4							
9月3日	6	9	11	12	2				
10月2日						2	7	11	20
11月2日									40

葉分析の結果は窒素は生育が旺盛な時期に多く吸収されており、花芽が形成され始めると吸収量は少なくなり、磷酸も枝の伸長初期に多く、その後は徐々に少なくなっている。しかし、加里は花芽の形成期に多く吸収された。

カルシウムは生育期間を通じてほぼ一定して吸収が行われている。

2. 肥料の種類とツツジの生育

ツツジ類は急激に塩類濃度が上昇すると根いたみを起し、甚しい場合は枯死するので、ツツジの鉢栽培では慣行的には油粕、骨粉など有機質肥料の配合による置肥の形で施用されている。しかし、それらの肥効が1か月程度しか続かないため、頻繁に追肥を行わなければならない、しかも大量の鉢物を生産する場合、1鉢1鉢が独立しているため均等に施用するには技術的にも、労力的にも農家にとっては非常な負担となっている。

鉢物生産の施肥合理化と省力化のため表-2に示した各種の肥料を用いて、その肥効とツツジの生育について試験を行った。

用土は鹿沼土25%、赤玉土50%、ピート25%の割合で配合したもの1ℓに対し、表-2の設計に従って肥料を混合しておき、5月2日に4号ポリ鉢に「桃山」の2年生生苗を1本づつ植付けて、残存株の推移とその後の生育を調査した。

表-3に見られるとおり、有機入り複合肥料(ホーム-1号)では8g、16g施用区とも定植1か月後には枯死株が出ており、2か月後の7月10日には1~2株が残存するだけとなった。

緩効性化成肥料(IBS-1)の場合も定植1か月後に1~2株が枯死し、翌年1月には6g施用区で2株が残存するに至った。さらに苦土有機入り複合肥料の場合には急速に枯死株が発生し、2か月後の7月には殆んど残存できず、1月には全株枯死した。

被覆複合磷硝安加里(ロング)の場合は140タイプ、270タイプとも4g区では7月までは全株残存しており、翌年1月の調査時にも僅かに1~2株の枯死が見られただけであるが、8g区では270タイプで2株枯死したの

表-2 肥料の種類と施肥量

肥料の種類	成分	用土1ℓ当り施肥量
	N P K	
有機入り複合肥料(ホーム-1号)	(6.7.5)	8g
〃		16g
緩効性化成肥料(IBS-1)	(10.10.10)	6g
〃		12g
苦土有機入り複合肥料(パワゲン)	(10.10.10)	6g
〃		12g
被覆複合磷硝安加里(ロング140)	(13.3.11)	4g
〃		8g
〃(ロング270)	(13.3.11)	4g
〃		8g

表-3 残存株の推移

肥料名・施用量	供試鉢数	残 存 鉢 数		
		6月13日	7月10日	60年1月30日
ホーム-1号 8g	10	8	2	2
" 16g	10	5	1	1
IB化成S-I 6g	10	9	5	2
" 12g	10	8	1	0
パワゲン 6g	10	6	2	0
" 12g	10	1	0	0
ロング140 4g	10	10	10	8
" 8g	10	9	6	3
ロング270 4g	10	10	10	9
" 8g	10	8	8	8

表-4 ツツジの生育と花枝数

肥料名・施用量	残存株数	樹 高	株 張 り		花枝数
			タ テ	ヨ コ	
ホーム-1号 8g	2株	11.0cm	13.0cm	8.0cm	2.0本
" 16g	1	12.0	12.0	8.0	4.0
IB化成S-I 6g	2	14.0	20.5	11.5	1.5
" 12g	0				
パワゲン 6g	0				
" 12g	0				
ロング140 4g	8	16.6	21.6	15.1	5.3
" 8g	3	16.3	22.6	12.7	4.3
ロング270 4g	9	17.0	21.9	17.0	4.7
" 8g	8	16.4	23.8	16.3	5.8

写真 肥料の種類とツツジの残存状態
(7月10日撮影)

に対し、140タイプでは7株枯死しており、140タイプは溶出速度が早い
ため障害を起したものであろう。

残存したツツジの生育状態を見ると、樹高は有機入り複合肥料は11~12cm、緩効性化成肥料が14cmであったのに対し、被覆燐硝安加里は各区とも16~17cmと高く、枝張りも他が12~13cmであったのに対し、22~23cmと非常に生長が良かった。(表-4参照)

花枝数についても有機入り複合肥料と緩効性化成肥料は2~4本であったが、被覆燐硝安加里ではいずれも4~3~5、8本と多く着生しており、品質の高い鉢物が生産できることが認められた。

以上の試験の結果からヒラドツツジ鉢物生産に於いて被覆燐硝安加里の利用は、定植時に元肥として用土に混合しておけば追肥の必要もなく、用土調整の作業と同時に施肥作業も完了するので非常に省力化できる便利な肥料と言える。

施肥量は鹿沼土、赤玉土、ピート(25:50:25)の配合土10ℓ当り140タイプ、270タイプいずれも40g程度を混合すればよく、その肥効は緩慢で、一時的に濃度が高まることもなく、長期に亘って持続することから、ツツジは枯死することも少なく、生育は順調で枝も充実しており、花枝数も増加した。しかも油粕、骨粉

の有機肥料の置肥で栽培した場合に見られる冬季から春にかけての下葉の落葉が少なく、葉の色も濃緑の状態越冬しており、開花時の花と葉の調和のよい高品質の鉢物が生産され、ヒラドツツジ鉢物生産に好適な肥料であることが認められた。

左から

- ロング270 4g・8g
- ロング140 4g・8g
- パワゲン 6g・12g
- IBS-I 6g・12g
- ホーム-1号 8g・16g